



# 通信



VOL.30

令和4年2月1日

作成：長岡正宏

合気道は「脳」で考えるのではなく、「心」で行うものです。 by Nagaoka

## 道心探求

言ったことを必ず実行することを「有言実行」、知識と行為が一体で矛盾しないことを「知行合一」という。人としての信頼関係を築くためには、もっとも必要なことであろう。何かをしようとする時は、「そうしよう」と「思う」ことから始まる。この「思う」ことが非常に大事である。「思う」ことは、誰でもできることだから、大したことではないと思われるかもしれない。しかし、何も思わなければ何もしないだろう。だから、何も起きない。それは、単なる思いつきではなく、その人の知識と経験から湧き出てくるものだ。京セラ創業者の稲盛和夫さんは、「何か新しいことをなそうとするなら、まず思うことが大切です」と言われている。

「考える」ことは脳を働かせるが、「思う」ことは「心に思う」と表現されるように、心の作用が関係しているように感じる。すなわち、「考える」は理的で、「思う」は情緒的である。心が素直であれば、良い思いが生まれてくるだろう。すると、当然善い行いをするようになる。

相手と争うことなく相手を受け入れるオープン・ハートで合気道の稽古をしていると、やがてウォーム・ハート(温かい心)が生まれてくるだろう。そして、相手もそのウォーム・ハートを感じてくるようになり、相手にもウォーム・ハートが生まれてくるだろう。これこそが、合気道だ。だから、相手と争わないと「思う」ことが大切になってくる。合気道には勝ち負けは存在しない。大事なものは、道心探求で何度も述べたように「心」だ。心さえ間違っていなければ、合気道は必ず上達する。開祖が「合気道は禊技じゃよ」と言われたのは、自分はもちろん相手の心も合気道によって邪心が取り除かれることを意味していたのではないだろうか。

## 合気の旅

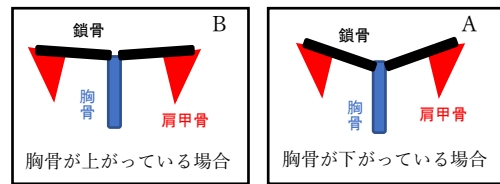
大正八年末、北海道白滝にいた植芝盛平のもとへ紀州田辺より「チキトク」の電報が届く。盛平は大東流の武田惣角師に家土地を譲渡し、一二月末に白滝を去った。しかし、何故か真直ぐに田辺に帰らず、大本教のある京都府綾部へ立ち寄り三日間滞在する。田辺へ帰郷したのは翌年の一月四日であった。父の与六は残念ながら一月二日に息を引き取っていた。途中、綾部へ寄り父の最期に間に合わなかったことを新類縁者からかなり非難を浴びせられたという。父を失った悲しみと重なり、盛平は、真剣を持ち裏山に上り数日間狂ったように虚空を斬って斬って斬りまくった。そうしたある日、通報を受けた田辺署から駆けつけてきた部長および巡查三人に捕まる。ところが、駆けつけた部長は軍隊時代の旧部下だった。部長が巡查たちに「この方は、兵隊の神様だったんだ」といって、無事に釈放してくれたそうである。写真は自宅跡の裏山の山頂である。おそらく、ここで盛平は真剣を振り回したのだろう。当時の盛平がどんな気持ちだったのかは知る由もない。だが、この時盛平が田辺を去る決意をされたのではないかと私は思っている。



この数か月後、一家を上げて田辺を去り綾部へ移住している。そして、綾部で自分の道場を開き、武道家として大成していくことになる。私にとって、田辺の海が見渡せることが田辺の旅で一番印象深い場所になった。

## ○△□の道

VOL.27で胸骨と肩甲骨の関係を簡単に指摘した。もう一度、復習をしよう。



図A・Bは、胸骨・鎖骨・肩甲骨を簡略して示したものである。図Aは、胸骨が下がっている状態になっている。すなわち、肩が上がっているのだ。図Bは、胸骨が上がっており、相対的に見て肩甲骨が下がっていることが分かる。この図Aと図Bを見てお分かりだろうか。鎖骨の角度が変わっていることを。

そこで、VOL.6のワンポイント・アドバイス「腕は何処から何処まで？」を思い出してもらいたい。鎖骨も腕の一部であると言及している。鎖骨の上下運動で腕の一部である鎖骨を動かしていることだ。その胸骨は、呼吸・吸気の呼吸筋の作用によって上下運動していることなのである。この動きに逆らうことなく自然に動いていけば、無理のない動作が生まれてくるはずだ。だから、呼吸は非常に重要な要素になってくる。これで、呼吸と腕の関係がオープン・ハートで活かされていることが理解できただろうか。武士は自然にオープン・ハートをしていった。何故ならば、オープン・ハートしないと抜刀できないからである。



開祖のオープン・ハート！  
上腕骨が外旋、前腕が回外して手掌がやや上向きに。

## ～開祖の言葉～

合気道は至誠の道を練磨することです。至誠は本を忘れず自己を知り、自己大成への道であります。 「精説合気道秘要」東京書店より

